

フェミニズムの言葉*

橋本邦彦

The Language of Feminism

Kunihiko HASHIMOTO

要旨：女性語の特質と変遷について述べ、その再評価を提言する。

キーワード：タメぐち、フェミニズム、性差別、女性語

<タメぐち>というものがある。ある英語のクラスで定期試験の出題範囲について説明していると、最前列の女子学生が唐突に質問してきた（のだと思う）。

「それじゃあ、まじでヒアリングなんかもあるわけ？わたし、ヒアリングとかぜんぜん苦手なんだけどな。」

テレビ番組に出演していた女子高生の意見では、タメぐちは「平等主義の言葉づかい」なのだそうである。性別を無効にし、世代間の断絶を埋め、身分・職業・偏差値などの違いを忘れて、「みんな友だち」の気分にしてくれる魔法の言葉というわけだ。

<てよだわ言葉>を御存知だろうか。外国人向けの独習書では、日本語に特有の女性専用の文末形式などと解説されている。

夏目漱石の『こころ』第16章に、茶の間での「私」と先生の奥さんとのやりとりが描かれている。その会話の最後で奥さんは、少々辛辣な言葉を吐露する。

「議論はいやよ。よく男のかたは議論だけなさるのね。おもしろそうに。空の杯でよくああ飽きずに献酬ができると思いますわ。」（下線、筆者）

『こころ』は大正3年の発表である。時代は下って、昭和5年発表の林芙美子著『放浪記』前半「12月×日」の箇所にも、「私」が職業紹介所の受付で「桃色の吸取紙のようなカード」を渡す件がある。その時、受付の女は、次のような失礼なせりふを口にする。

「女中じゃいけないの。……事務員なんて、女学校出がうろうろしているんだから駄目よ、女中なら沢山あってよ。」（下線、筆者）

さらに戦後昭和21年発表の太宰治の戯曲『冬の花火』第1幕皮切りとなる数枝の科白を見てみよう。

「負けた、負けたと言うけれども、あたしは、そうじゃないと思うわ。ほろんだのよ。滅亡しちゃったのよ。」（下線、筆者）

尾崎喜光「女性語の寿命」(『日本語学』1999年9月号)によると、<てよだわ言葉>が小説の会話部分に登場するのは、明治20年代に入ってからである。明治、大正、昭和と、実に60年余りに渡って、この女性専用の表現が生き延びてきたことがわかる。

ところが、現在<てよだわ言葉>の含まれた会話に接すると、ひどく居心地の悪い気分になる。日本語として確かに意味が理解できるし、男性ではなく女性が語っているのだとたちどころに了解できるにもかかわらず、ロック・コンサートを聴きに振り袖で行くような、場違いな印象を覚えるのである。そのわけは、日常の会話で<てよだわ言葉>を耳にする機会がほとんどないからである。少なくとも、私の周囲の女性たちは、「腹減ったあ」と叫ぶが、「おなかすきましたわ」とはおっしゃらない。

先述した尾崎の調査では、「雨よ」、「雨ね」、「降るわよ」の使用率は、50代の女性の80パーセントをピークに、年齢が下がるほど激減していき、20代以下の、特に大学生では、限りなくゼロに近づくことが報告されている。まさに、風前の灯状態なのだ。

「仮面」の主人公は、次のような独白めいた言葉を呟く。

「おあいにくさま 何を期待していたの 甘い慰め 無言のぬくもり そんなに震えて何を怯えてるの あれはあんたの正体じゃないか 知ったことじゃない あんたの痛み勝手に底まで落ちぶれるがいい 羽振りの良かった時代のように 思い上がった口をききなさい 己れを知らない子供のように なんでもできそうな口をききなさい ねえ覚えてやしないでしょう あたし あんたが文無しだった頃から 近くにいたのにさ 近くで 見とれていたのにさ」(中島みゆき全歌集Ⅱ「仮面」より 朝日新聞社)

この詩の一節のどこにも、あからさまな女性語は現れていないが、女性が惚れた男性に向けて語っている状況を思い浮かべるのはさほど難しくはないだろう。一人称代名詞「あたし」以外積極的な女性言葉を使っていないからこそ、私たちの日常の現実と響き合い、主人公の表情、心情が素直に心の中にしみ込んでくるのである。

アメリカの言語学会という大きな組織がある。言語を調査したり分析したりする言語学を専門とする酔狂な連中の集まりであり、ワシントンD.C.に本部がある。毎年、学術論文を掲載した学会誌の他に、『ブルティン』と呼ばれる会報が送られてくる。会長選挙の公示、研究会・学会の開催の通知、出版物、会計報告等を知らせるのが、主な役目である。その1992年3月発行の第135号に、

「性による差別のない慣行のためのアメリカ言語学会の指針」と題する通達が載っている。「指針」は、次の文章で始まる。

「性差別主義的な慣行により女性の品格が貶められたり無視されたり、一定の型にはめられたりする。それは、意図して起こるといよりは、結果として起こる事柄なのである。今日、学術論文を含む調査研究の文書の中には、かなりの程度差別主義的な表現のあることが認められている。」(訳文、筆者)

そこで、差別的な言辞を排し、ゆがんだ誤りをしないよう注意を喚起するために、10項目から成る勧告条項が挙げられている。

例えば、「スチュワーデス(旅客機の客室乗務員)」、「チェアマン(会議の議長)」のよ

うに、女性、男性の性を明示する語は、それぞれ、「フライト・アテンダント」、「チェア・パーソン」もしくは「チェア」という性差の表れない語に置き換える。重役の名前が常に「ミスター・スミス」で、姓に敬称を付けるのに対し、その秘書を「メアリー」と名前だけで呼ぶのを避ける。「ミズ・メアリー・ブラウン」という風に、姓と名に敬称を付けなければならない。データとなる例文用に、「彼女の胸は豊満で、フェルモンをまき散らしていた」とか、「男の子たちは皆メアリーにキスしたがった」など、女性が不快に感じる文は作らない、等々、実に具体的でかゆい所に手の届く警告が続くのである。こうした足かせを横目でにらみながら、言語に関する著述がすらすらできるのか不安であるが、従来、男性の言語学者の中には、ユーモアのつもりでか論の展開を興味深いものにするつもりでなのか詳らかではないが、女性差別と指弾されても仕方のないような例文をことさら列挙する者もいたことは事実である。(比較構文の例として「妾をなぐる男は、女房をなぐる男より早くに後悔する」、部分否定の例として「独身の女性が必ずしも皆ヒステリーをおこしやすいというわけではない」等々。)

アメリカの女性言語学者（性別を明記して申し訳ないが）ロビン・レイコフは1975年に発表した『言語と女性の場』で、女性が言い淀み表現や疑問文などの断言を避ける表現法を好んで用いるのは、女性が男性に比べてより強い言語使用の制約下に置かれていて、その制約に違反すると厳しい社会的制裁が科せられるからだと主張した。女性の性差別からの解放は、女性言葉からの解放を前提とするというのである。このフェミニズム言語理論は、全米の女性研究者に広い支持を得、やがて、日本語における女性語の研究に大きな影響を及ぼすことになる。アメリカ言語学会の先の通達は、この運動の一つの到達点であった。

さて、結びである。女性特有の表現は、差別と抑圧の象徴であったのだろうか。この象徴を打破する目的で、若い世代の人たちは、タメぐちを用い、時に、ひどくぞんざいな野郎言葉をぶっぱなすのか。振り子のぶれを直そうとして、極端に左方向へ振り過ぎてしまったということなのか。女性言葉には、否定的な面しかないのか。

まず第一にはっきりさせておかなければならないのは、女性語の呪縛から逃れようと男性語に容易に乗り換えてはならないという点である。もう一方の性である男性語に屈伏したことになる。コギャル言葉は文化の一側面を見事に映し出しているとはいえ、無自覚に用い続けていると、男性言葉の負の特徴を取り立てて受け継いでしまう危うさを抱えているのである。

次に、女性語への再評価である。〈てよだわ言葉〉は極端な表現法だけれど、「～するでしょ」、「～だものね」などの表現は、響きが柔らかで、押しつけがましきがない。「～しましょう」、「～でございます」、「お～になります」などの丁寧表現は、コミュニケーションに暖かな親近感を醸し出す。女性語の肯定的な側面に注目し、正当な評価をしていくことが肝心であろう。

最後に、男性後（もっと正確に言うなら、男性優勢型言語）か女性語（女性優勢型言語）のどちらか一方に規範を求めるのではなく、双方の言語が内包する豊かな表現形式

を備えた、第三の、性に関して中立の立場の言葉を作り出す必要がある。明治時代に、落語家三遊亭圓朝の落語の速記録を読んで、二葉亭四迷が言文一致体を練り上げたように（関根黙庵著『講談落語今昔譚』平凡社、矢野誠一著『三遊亭圓朝の明治』文藝春秋社）、創作に従事する者たちは、その作品を通して、性差を超えた新しい表現形式を構築する使命があるのではないか。等身大の自己の経験や心情の告白の物語を綴ることも結構だが、文学上の創作の営為は、綴るための手段としての言語へと連なっていくはずではなかろうか。そこにこそ、言葉のフェミニズムを止揚する道が隠されているように思われてならない。

注

* このエッセーは『室蘭文藝』第33号（2000年）初出の『言葉のフェミニズム』を加筆訂正したものである。

執筆者紹介：橋本 邦彦

所属：室蘭工業大学 共通講座・言語科学講座

Email：kuni3587@mmm.muroran-it.ac.jp

Tel&Fax：0143 - 46 - 5833